

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

10回生の石川です。

卒業して、しばらくは福祉の世界にいましたが家族が増え、やむなく福祉から身を引き一般の仕事に就きました。人相手の仕事で高齢者や障害のある方にも時々出会うと、つい「どうしたら喜ぶかな」って考えている自分です。

現在は子どもたちと過ごしながら、自分のやってきた福祉の仕事をゆっくり子どもの幸せを考えながらその体制差を改めて感じ、介護の大切さを社会が認めるようになることが大事だと、医療と同じように福祉も大切であることをゆっくり子どもたちに話すことも多くあります。親になって、守るべき生活と責任を担うと、以下の保育や介護が人々の生活や人生になくてはならないものかと、保育士と介護福祉士の資格を取得した専攻科福祉専攻がターニングポイントであったと、今、気が付いています。

後輩たちへ、福祉の職場は、コロナ禍で感染予防対策をしながら目まぐるしく変化してとても大変な状況だと思えます。しかし、自分がいた職場は、一度も感染症が出ておらず、一人ひとりが責任を持った行動をしていることに感動しました。

また、そこに、ご利用者や家族の協力があり、この苦難をどうみんなでのりきるか一緒に乗り切っていることに安堵しました。「怒り」「笑い」の理由が手に取るようになるまで時間がかかりますが、最期に亡くなった命の尊さを初めて知り自分の祖父母ではないのに、大泣きをし、後悔をしたこともあります。

若い私にとって介護は、今の自分を支えてくれる思い出になっています。

ぜひ後輩の皆さんも、長い目でこの福祉の仕事で魅力を感じられたら、専攻科福祉専攻の学生であったことにあらためて感謝できると思います。そうでありますように。

2021年12月

10回生 石川正人